

Japanese Literature—— 39



現代日本の文学

野間 宏集

伊藤 整 （監修委員）
井上 靖
川端 康成
三島 由紀夫
足立 卷一 （編集委員）
奥野 健男
尾崎 秀樹
北 杜夫 （五十音順）

学習研究社

現代日本の文学

33

全50巻

分割払価格 39,000円

現金価格 35,500円

檀 一 雄

織田作之助 集

田 中 英 光

昭和45年11月1日 初版発行

昭和48年5月1日 十版発行

檀 一 雄

著 者 織田作之助

田 中 英 光

発行者 古岡秀人

発行所 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145 振替東京142930

電話 東京(720)1111 (大代表)

印刷 大日本印刷株式会社

中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)学研
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ、
電話は、東京(03)720-1111 内線352,353か、東京(03)
727-1600へお願いします。



彼らは大阪城のなかの幾つもの城門をぬけて歩いて行った。准尉は部隊の敬礼をとるのが面倒なので二人からいくらかはなれるようにして歩いた。そこで引率の内村一等兵は、軍隊礼式令を幾度か頭の内で整理するかなのようなあふなげな号令をかけて、歩調をとった。

（「真空地帯」）



准尉は先刻師団司令部の控室でも木谷が昨夜から予想していた長々しい説教や、訓話を彼にしなかった。いや訓話ばかりではなく、ただの短い注意さえ与えようとはしなかった。さらに腰掛けていた木谷が立ち上つてした室内の敬礼に対するまともな答礼さえしなかった。

（真空地帯）

旧師団司令部、現在は大阪市立博物館になっている。





木谷は三日前所長面接所で仮釈放の内示を受けたのだ。彼は作業場から非番看守に後を追われて灌水浴場の横を通り独居房へぬけ看守の宿直室の横から右にそれて営庭のはしを斜めに横切り、衛兵所に行く途中の左側にある二階建ての前まで出た。建物は緑色の開き戸を一つもつくりだ。（「真空地帯」）

上 東大阪にある旧陸軍刑務所の塀。現在は河内少年院になっている。 左 刑務所から見える生駒の山。





その画集の中の暗い、嘆きのよう
な、痛み、呻き、疼いている人々
の多くの姿は、彼にあらわに、彼自
身の苦しみを思い起させ、彼はそ
れらの絵を見まいと思いつながら、
しかしやはりその絵のもつ何か不
思議な力にひかれてその頁を繰
ることになるのである。

（「暗い絵」）

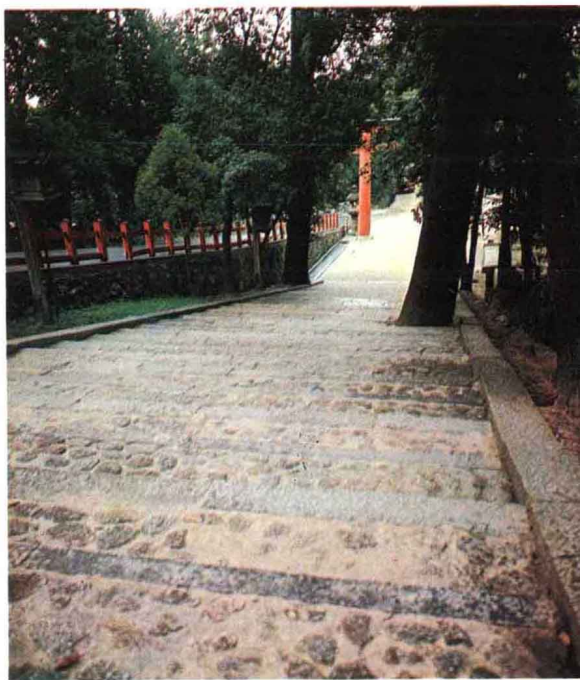
上 ブリュエルの「狂女フリ
ート」 左 その部分



「……俺はこの間から考えてるんだがね、この最近三年間の京大は、ちょっと不思議に聞えるかも知れないが左翼の樂園だったんだよ、このことはよく注意してみる必要がある。こんな風景はいまどきの他の大学にはないんだね。考えて見れば、俺達の大学へ入った年高等学校を追放されたり、処分をくらったものが、みなここに集って来たのだ。いわば一応の花ざかりさね。暗い花ざかりといってもいいね。」

（「暗い絵」）

下 京都吉田神社 左 吉田山より京都大学をのぞむ



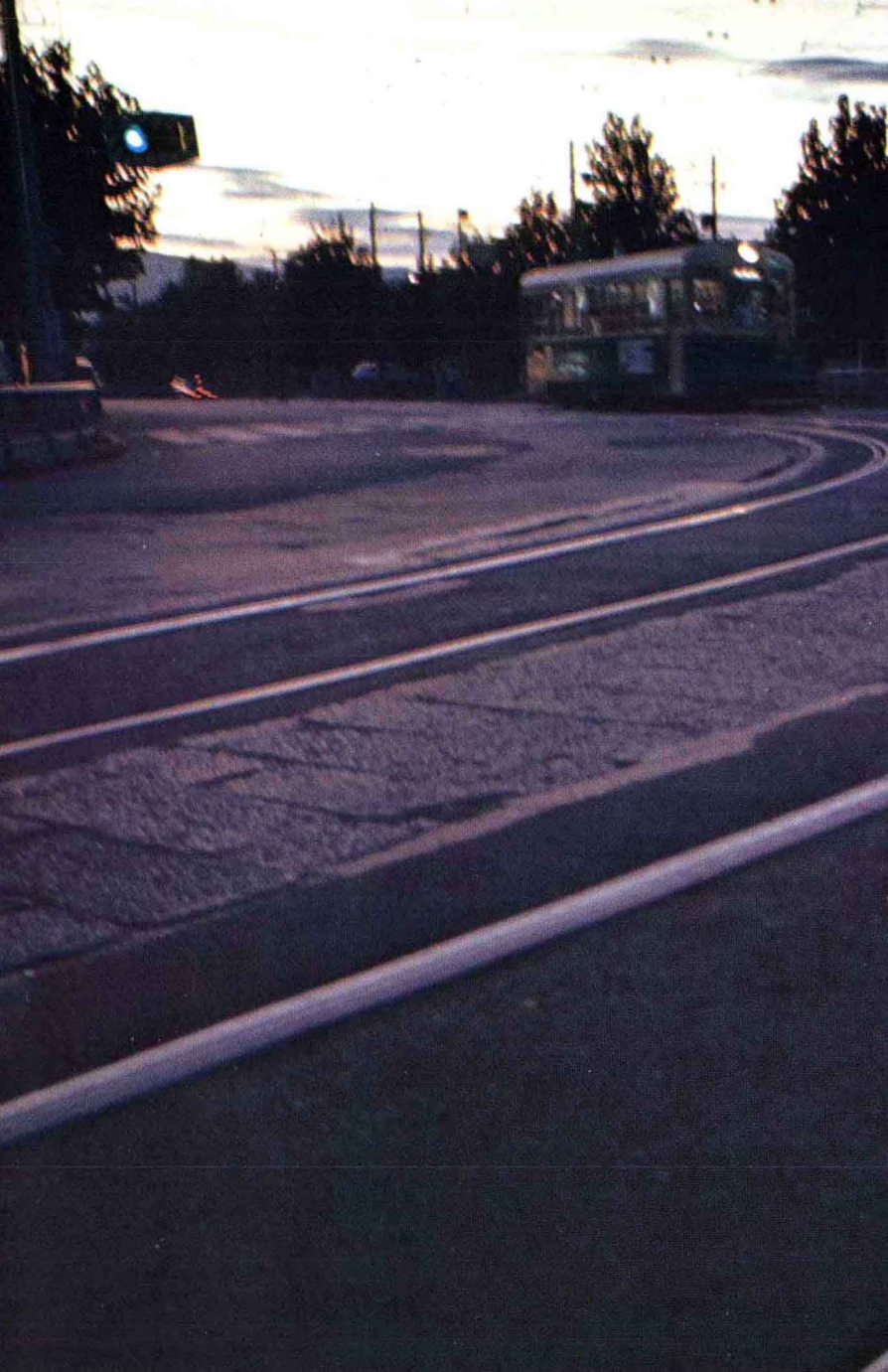




二人は黙って歩いて行つた。間もなく石橋を渡り
銀閣寺の市電の停留場の広場に出て来た。そこは
終点で五、六人の乗客をのせた電車が一台、車内
の明りを、月の光が白い石畳の上に投げ、百万遍
の方に長く続く線路の上に止っている。二人はそ
の電車の前を通り、線路を横切り渡つていった。

(暗い絵)

京都 銀閣寺道







黒谷別所^{カクタニ}は叡山^{えいざん}の別所で法然上人黒谷源空が念仏門をひらいたところであり、二十四歳の日から四十三歳まで閉じ籠っていたところである。以前海塚は父の海塚実鸞が生きていた時、父に連れられてこの黒谷に来たことがあるが、源空が専修念仏に帰した黒谷の大きな山門は、ただそれだけでその時父の頭上に重くのしかかった。

(「わが塔はそこに立つ」)

上 京都 黒谷 光明寺山門 右 境内階段より山門をのぞむ。





彼は塔が自分に呼びかけているのを知っている。塔はそのたかいところから、彼が彼自身の闇なるものを裂きつづけなければならないことをささやいているのである。

(「わが塔はそこに立つ」) 京都 真如堂三重塔